

電器店建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

多肥松林遺跡(電器店)

2006年2月

高松市教育委員会
株式会社 ビッグ・エス

例　　言

1. 本報告書は、株式会社ビッグ・エスが計画する電器店建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、高松市多肥上町に所在する多肥松林遺跡（たひまつばやしいせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査地ならびに調査期間は次のとおりである。
調査地：高松市多肥上町 1219 番地他
発掘調査：平成 17 年 11 月 16 日～平成 17 年 11 月 28 日
整理作業：平成 17 年 11 月 17 日～平成 18 年 2 月 28 日
3. 発掘調査及び整理作業は高松市教育委員会が担当し、その費用は株式会社ビッグ・エスが全額負担した。
4. 発掘調査は高松市教育委員会文化部文化振興課 文化財専門員 大嶋和則が担当した。
5. 本報告書は執筆から編集まで大嶋が行った。
6. 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の関係機関ならびに方々から御教示・御協力を得た。記して厚く謝意を表すものである。（五十音順、敬称略）
香川県教育委員会、河西建設株式会社、篠原事務所、片桐孝浩、信里芳紀
7. 掃図として、国土地理院発行 1/25,000 地形図「高松南部」を一部改変して使用した。
8. 本報告の高度値は海拔高を表し、方位は磁北を示す。
9. 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SB：掘立柱建物跡 SD：溝 SK：土坑 SP：ピット
10. 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

目　　次

第 1 章 調査の経緯と経過	
第 1 節 調査の経緯	2
第 2 節 発掘調査及び整理作業の経過	4
第 2 章 地理的・歴史的環境	
第 1 節 地理的環境	5
第 2 節 歴史的環境	5
第 3 章 調査の成果	
第 1 節 I 区の調査	7
第 2 節 II 区の調査	13
第 4 章 まとめ	22
観察表	25
写真図版	27
報告書抄録	

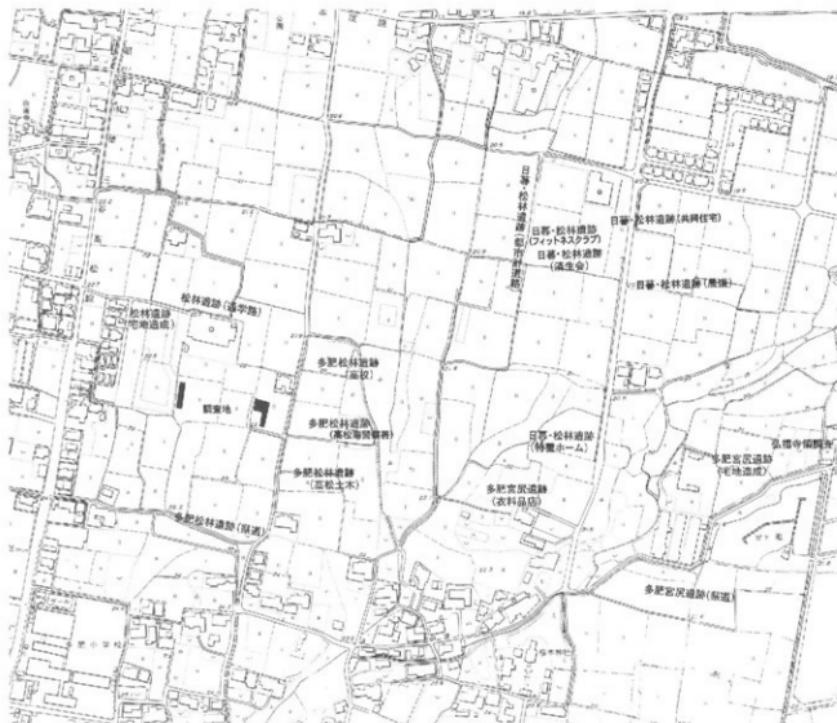
第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

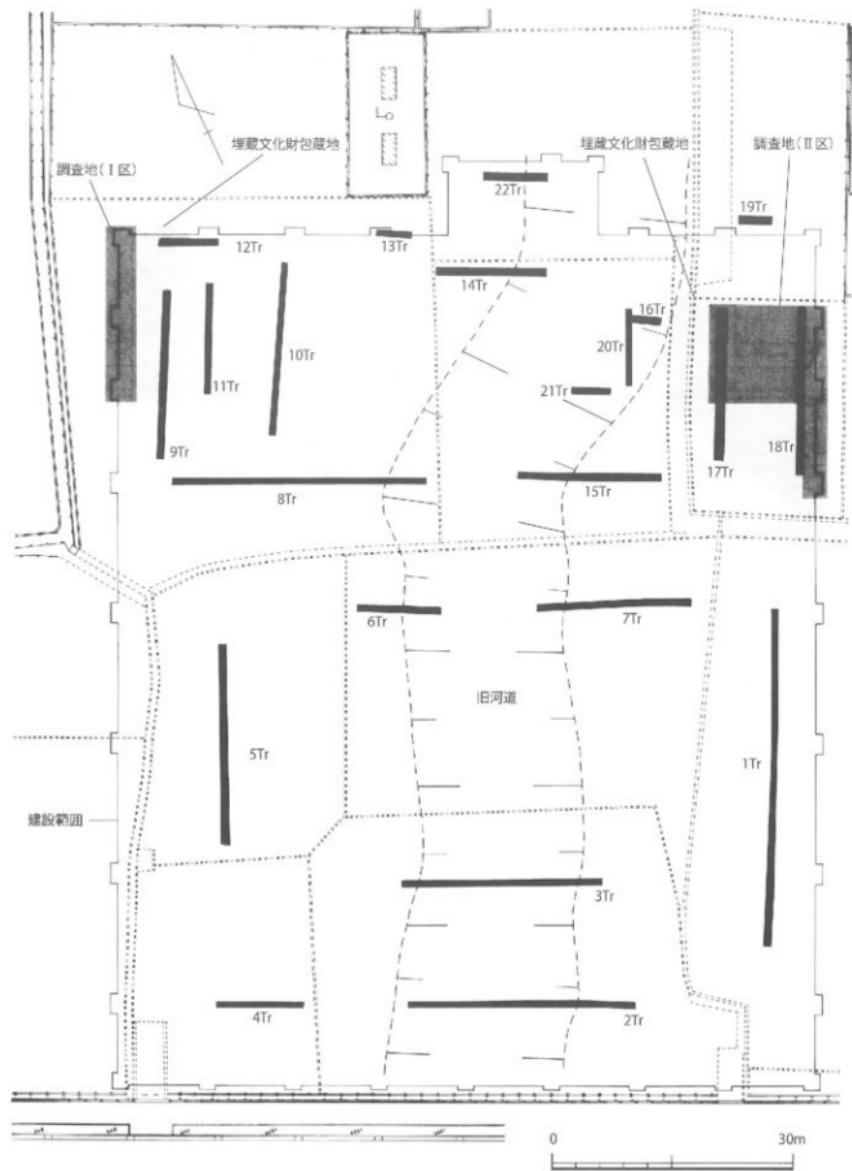
平成17年6月に株式会社ビッグ・エスが計画する電器店建設工事に関し、予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会があった。高松市教育委員会では工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である松林遺跡及び多肥松林遺跡に隣接しており、当該地まで包蔵地が広がっている可能性が考えられたため、株式会社ビッグ・エスに対し、「現状では周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、周知の埋蔵文化財包蔵地に隣接していることから、遺跡が存在する可能性が



第1図 調査地位置図 (S=1/25,000)



第2図 調査地及び周辺発掘調査地位置図 (S=1/5,000)



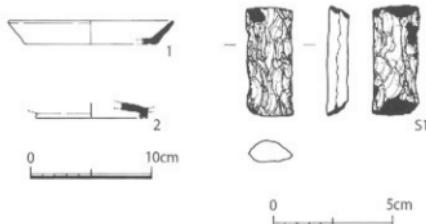
第3図 試掘調査地位置図 (S=1/600)

極めて高く、工事着手後に遺跡が発見された場合は工事の進捗に多大な影響を及ぼす可能性もあるため、工事着手前に確認調査を実施することが望ましい。」と説明を行い、任意協力をお願いした。

その後、8月25日に株式会社ビッグ・エスから高松市教育委員会に対し、確認調査の依頼があった。協議の結果、工事予定地のうち工事により地下構造に影響のある建物建設部分約9,333m³を試掘調査対象地とし、10月26・27日に試掘調査を実施した。

試掘調査では22箇所のトレンチ調査を実施した。調査対象範囲の中心部分には南北に流れる旧河道が存在した。この旧河道は、多肥松林遺跡（県道）から、今回の調査地を通り、松林遺跡（通学路）、さらに多肥松林遺跡（高校）へ流れる流路であることが予想される。なお、旧河道の埋土には遺物がほとんど含まれていなかった。旧河道の東西両岸は微高地となっており、若干の遺構・遺物を検出したが希薄な状況であった。ただし、第9・12トレンチ及び第17・18トレンチ周辺では部分的に遺構が密集していた。このため、第9・12トレンチ周辺の約220m³及び第17・18トレンチ周辺の約400m³については保護措置が必要と判断した。

高松市教育委員会は、香川県教育委員会に対して確認調査結果を報告するとともに、11月9日に株式会社ビッグ・エスから提出された埋蔵文化財発掘の届出（文化財保護法第93条第1項）を進呈したところ、香川県教育委員会から事前に発掘調査を実施する旨の回答を得た。これを受けて、株式会社ビッグ・エスと協議を行った結果、工事着手前に発掘調査を行うことで合意し、11月15日に埋蔵文化財調査協定書を締結した。高松市教育委員会は発掘調査・整理作業の実務を行い、その費用負担および契約・支払事務については株式会社ビッグ・エスが行うこととした。



第4図 試掘調査出土遺物実測図

(土器:S=1/4, 石器:S=1/2)

第2節 発掘調査及び整理作業の経過

工事予定地内における埋蔵文化財の包蔵地は620m³であるが、そのうち工事により遺跡に影響を及ぼす範囲約320m³について調査を実施した。発掘調査は平成17年11月16日に開始し、11月28日に終了した。整理作業は11月17日から開始し、12月28日に終了した。その後、平成18年2月28日まで報告書の編集作業を行った。工程表は以下のとおりである。

第1表 作業工程表

	11月	12月	1月	2月
発掘調査				
整理作業	洗浄			
	接合			
	実測			
	トレース			
	レイアウト			
	執筆・編集			

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松市は香川県の中央やや東寄りに位置し、市域の大部分は讃岐平野の一部を形成する高松平野が広がっている。南部に讃岐山脈の北縁がかかり、東部に屋島、立石山塊、中央西部に石清尾山、淨願寺山、西部に青峰など五色台、堂山の山系が連なる。いずれも讃岐山脈の基盤である洪積台地と同じ地層からなるメサ、あるいはビュート型の溶岩台地で、20～300mの低い山地である。北方はひらけ、瀬戸内海に面し、備讃瀬戸を挟んで岡山県と対峙する。

高松平野は、讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野である。高松平野には、西から本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川といった河川が北流しているが、なかでも香東川が平野の形成に最も大きな影響を及ぼしており、現存の春日川以西が香東川による沖積平野といわれている。現在、石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は17世紀初めの河川改修によるもので、それ以前には現在の香川町大野付近から東へ分歧した後、石清尾山塊の南側から回り込んで、平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお、17世紀の廃川直前の流路は、御坊川として今でもその名残りをとどめている。

高松平野を流れる諸河川は、南の讃岐山脈から平野への流入口で程やかな傾斜を持つ扇状地形の沖積平野を形成し、農耕に適した地味豊かな土壤をもたらしたが、諸河川の中流域は伏流し、表層は濁れ川になることが多く、早くからため池を築造して水不足を解消してきた。これらのため池は、年間1,000ミリ前後と降水量の乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠なものである。また、今回の調査地である多肥地区周辺は、ため池に加えて出水（ですい）と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで、両者を併用した特徴的な配水網と織密な水利慣行を伝えてきた。調査地周辺では、栗木出水、平井出水、鈴木出水等が見られる。しかし、昭和50年の香川用水の通水によって、一帯は三谷町の三郎池の受益範囲に取り込まれ、農業用水の確保の不安が払拭された反面、地元水源を核とした水利慣行が急速に消滅するとともに、ため池や出水の水資源自体もその役割を失いつつある。

第2節 歴史的環境

今回の調査地周辺は、香川県立高松桜井高等学校や都市計画道路の建設等に伴う発掘調査が行われ、面的に遺跡の広がりや内容が判明している地域である。高松平野の歴史的環境は他の報告書に譲ることとし、ここでは周辺の調査について述べる。

旧石器・縄文時代の遺跡は、今回の調査地周辺では知られていない。松林遺跡や多肥松林遺跡の旧河道中からわずかに縄文時代晚期の遺物が出土している程度である。当該期の遺跡は高松平野全体でもほとんど知られておらず、不明な点が多い。

弥生時代前期になると、多肥松林遺跡で溝が検出されているほか、松林遺跡では集石遺構が見られる。中期中葉になると、香川県立桜井高等学校の中心部を南から北へ流れる自然河道が埋没を始めている。この流路から上器とともに、鳥形木製品、木製農具等が出土している。流路の両岸には掘立柱建物や竪穴住居が営まれており、特に流路東側の集落域は日暮・松林遺跡まで広がっている。この時期には多肥松林遺跡の北西部において洪水砂層、松林遺跡において地震の液状化現象である噴礫が認められ、自然災害があつたことを物語っている。中期後半～後期前半には造構・遺物ともほとんど見られない。後期後半には日暮・松林遺跡において竪穴住居跡が多数検出されている。

弥生後期中葉以降には、幅5m程度の灌漑水路が多數削されており、古墳時代前期で埋没するものもあるが、古墳時代後期までの遺物を含む溝も存在する。また、日暮・松林遺跡や多肥宮跡遺跡においては古墳時代中期～後期前半の土器や木製品を包含する自然河道が検出されている。一方、古墳時代の集落域や古墳については不明である。

平安時代には周辺の自然河道の埋没がほぼ完了しており、多肥松林遺跡において掘立柱建物跡や溝が検出されており、溝からは斎串が多量に出土している。

中・近世においては条里地割の溝や掘立柱建物跡が検出されている。特に松林遺跡では香川郡の一条と二条の界溝が検出されている。また、日暮・松林遺跡においては多量の瓦器碗が出土している。

第2表 周辺の調査履歴（～2005.12.31）

遺跡名	調査期間	面積	調査機関	文献
松林遺跡（道字跡）	1995.5.19～1995.11.8	1,000 m ²	高松市教育委員会	1
松林遺跡（宅地造成）	2004.4.1～2004.4.12	800 m ²	高松市教育委員会	2
多肥松林遺跡（高砂）	1993.4.26～1994.9.6	17,600 m ²	香川県埋蔵文化財調査センター	3
多肥松林遺跡（高砂上木）	1994.10.1～1995.3.31	5,900 m ²	香川県埋蔵文化財調査センター	4
多肥松林遺跡（高砂山田西谷）	1997.4.1～1997.12.31	7,000 m ²	香川県埋蔵文化財調査センター	5
多肥松林遺跡（高松市署）	2003.12.1～2004.3.31	2,000 m ²	香川県埋蔵文化財調査センター	6
多肥松林遺跡（電気店跡）	2005.11.16～2005.11.28	320 m ²	高松市教育委員会	本書
口暮・松林遺跡（道字跡・高島路）	1993.11.15～1995.9.29	11,600 m ²	高松市教育委員会	7
日暮・松林遺跡（伊勢原）	2002.5.12～2002.7.31	2,200 m ²	高松市教育委員会	8
日暮・松林遺跡（高道）	2004.5.12	70 m ²	高松市教育委員会	9
日暮・松林遺跡（特養小一ム）	2004.6.23～2004.8.27	1,600 m ²	高松市教育委員会	10
日暮・松林遺跡（フィットネスクラブ）	2004.12.1～2005.1.7	800 m ²	高松市教育委員会	11
口暮・松林遺跡（共同上宅）	2004.12.11～2004.12.13	124 m ²	高松市教育委員会	12
多肥宮跡遺跡（都府村西谷道跡）	1997.4.1～1999.9.30	12,245 m ²	香川県埋蔵文化財調査センター	13～15
多肥宮跡遺跡（宅地造成）	2004.7.5～2004.7.16	205 m ²	高松市教育委員会	16
多肥宮跡遺跡（衣料品店跡付地）	2005.11.21～2005.11.25	120 m ²	高松市教育委員会	17

既存報告書（報告書が刊行されているものについては報告書のみを記載した）

松林遺跡

1. 大堀和則 1996『香川県立高松井高校周辺学路発掘に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 松林遺跡』高松市教育委員会
2. 大堀和則 2004『宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 松林遺跡（第2次調査）』高松市教育委員会

多肥松林遺跡

3. 山下重重 1989『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1編 多肥松林遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センター
4. 北山龍一郎 1995『高松土木事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 多肥松林遺跡』香川県教育委員会
5. 西村春喜 1998『多肥松林遺跡』『県道・河川開拓埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度』(財)香川県埋蔵文化財調査センター
6. 宮崎哲治 2005『高松南警察署移転発掘に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥松林遺跡』『香川県埋蔵文化財センター一年報 平成15年度』香川県埋蔵文化財センター

日暮・松林遺跡

7. 中西亮也 1997『都市計画道路福岡多肥上町施設建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 日暮・松林遺跡』高松市教育委員会
8. 大堀和則 2003『香川県済生会病院移転新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡（済生会）』高松市教育委員会
9. 大堀和則 2005『日暮・松林遺跡（道道）』『高松市内道路発掘調査概報 平成15年度』高松市教育委員会
10. 大堀和則 2005『特別養護老人ホーム（なでしこ作川）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡（済生会特別養護ホーム）』高松市教育委員会

11. 小川賛 2005『フィットネスクラブ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡（フィットネスクラブ）』高松市教育委員会
12. 大堀和則 2005『口暮・松林遺跡（共同住宅）』『高松市内道路発掘調査概報 平成15年度園田橋付近事業』高松市教育委員会

多肥宮跡遺跡

13. 桑本和彦ほか 1998『多肥宮跡遺跡』『県道・河川開拓埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度』(財)香川県埋蔵文化財調査センター

14. 植松浩祐ほか 1999『多肥宮跡遺跡』『県道埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度』(財)香川県埋蔵文化財調査センター

15. 小野秀幸ほか 2000『多肥宮跡遺跡』『県道・河川開拓埋蔵文化財発掘調査概報 平成11年度』(財)香川県埋蔵文化財調査センター

16. 小川賛ほか 2004『宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 多肥宮跡遺跡』高松市教育委員会

17. 大堀和則 2006『衣料品店跡高松建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 多肥宮跡遺跡』高松市教育委員会

第3章 調査の成果

第1節 I区の調査

(1) 調査地の概要と基本層序

調査地は、試掘調査で検出した旧河道の西岸微高地にあたる。調査区の西側隣接地には松林遺跡が所在する。現地表面の標高は22.2mを測る。周知の埋蔵文化財埋蔵地のうち、建物基礎で影響を受ける範囲の幅4m、長さ22.5m、面積約90m²部分について調査を実施した。調査区の北面と東面断面を第6図に掲載した。第1層は耕作土である。第2・3層は旧耕作土層で、第2層はSD1埋土と同じである。第4層は灰白色細砂層で、近世以降の遺構埋土と考えられる。第5層はにぶい黄橙色砂混粘質土である。第6層は褐灰色砂混粘質土で、調査区北半にのみ認められる遺物包含層である。第7層は褐灰色細砂～粗砂層で、洪水による堆積層と考えられ、調査区北端部分にのみ認められる。第8～18層は遺構埋土である。第19層は明黄褐色粘土で地山である。遺構面は第5層上面と第19層上面の2面検出したが、第5層上面は、近世以降の遺構面で、第19層上面まで10cmの堆積しかないことから、第19層上面の1面において遺構を検出した。I区では、溝11条、土坑9基、ピット14基を検出した。

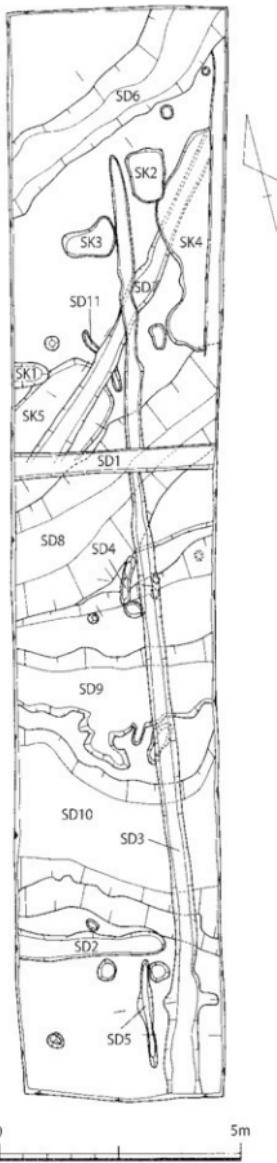
なお、遺構面直上で出土した上器を第7図に掲載した。3は土師質土器の鍋である。4は須恵器の壺である。5は京都系の縁釉陶器の皿である。

(2) 遺構

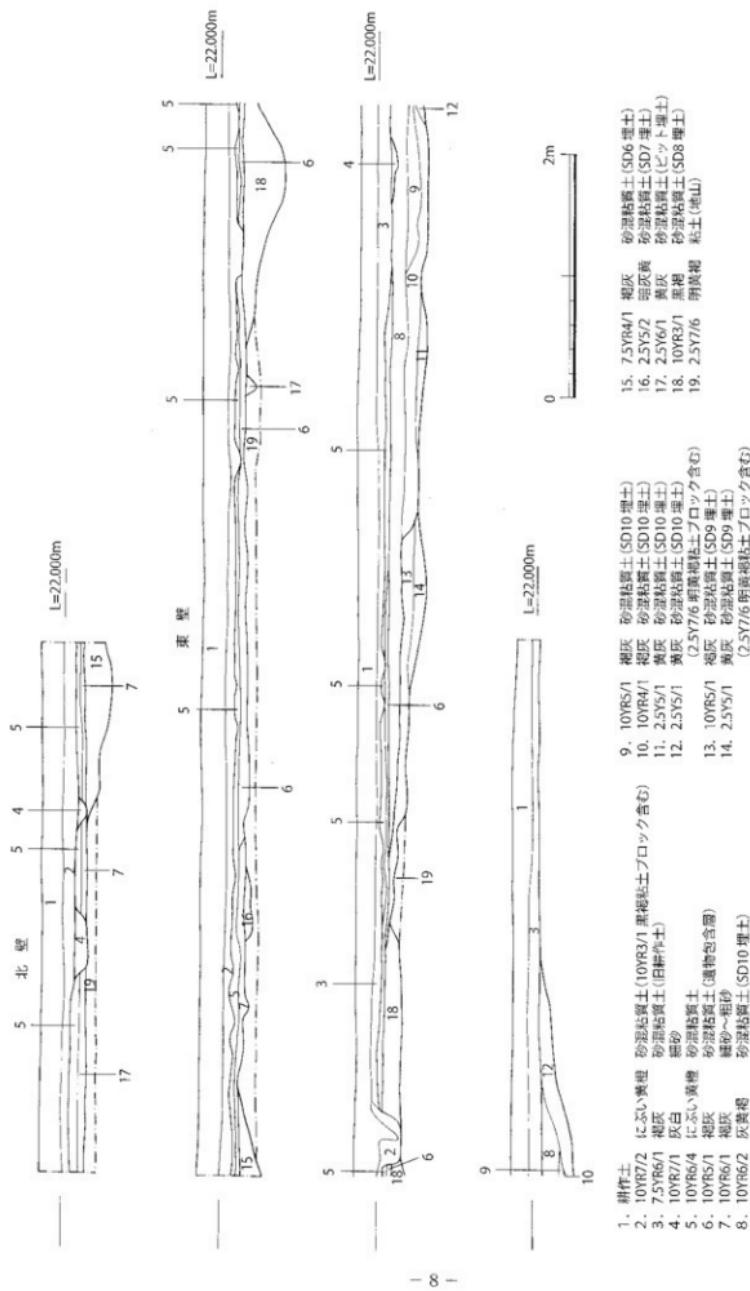
SD1(第5・6・8図)

調査区中央部で東西方向に流れる溝である。検出長4m、幅60cm、深さ25cmを測る。断面形態は逆台形を呈し、埋土は黒褐色粘土ブロックを含むにぶい黄橙色砂混粘質土の単層である。

出土遺物は第8図に掲載した。K1～K4はいずれも鉄釘である。図示したもの以外に、肥前系陶器片が出土している。近世以降の遺構面より掘り込まれており、旧耕作土とおなじ埋土であることから、近世以降の遺構と考えられる。



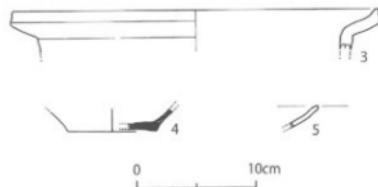
第5図 I区平面図 (S=1/100)



第6図 1区北壁・東壁断面図 (S=1/40)

SD2 (第5・9図)

調査区南部で東西方向に流れる溝である。検出長3.1m、幅60cm、深さ3cmを測る。薄い堆積で、埋土は灰白色細砂の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、SD3と埋土が同じであることから、近世以降の遺構と考えられる。

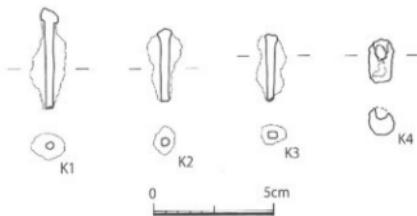


SD3 (第5・10図)

調査区の中央で南北方向に流れる溝である。検出長3.1m、幅60cm、深さ3cmを測る。断面形態は浅いU字を呈し、埋土は灰白色細砂の単層である。

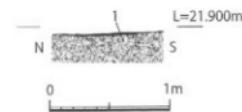
出土遺物は第10図に掲載した。6～8は土師器の环である。11世紀の遺物であるが、図示したもの以外に備前焼擂鉢や陶器片等が出土していることから、近世以降の遺構と考えられる。

第7図 I区遺構面上出土遺物実測図 (S=1/4)



SD4 (第5・11図)

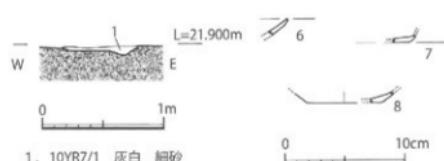
調査区中央で検出した南北方向の小溝である。長さ1m、幅16cm、深さ10cmを測る。断面形態はU字を呈し、埋土は灰白色細砂の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、SD3と埋土が同じであることから、近世以降の遺構と考えられる。



第8図 SD1 出土遺物実測図 (S=1/2)

SD5 (第5・12図)

調査区南部で、検出した南北方向の小溝である。長さ2.2m、幅32cm、深さ2cmを測る。薄い堆積で、埋土は灰白色細砂の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、SD3と埋土が同じであることから、近世以降の遺構と考えられる。



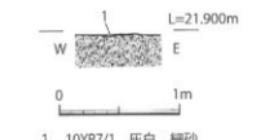
第9図 SD2 断面図 (S=1/40)

SD6 (第5・13図)

調査区の北端で検出した溝である。検出長6.2m、幅1.45m、深さ20cmを測る。断面形態



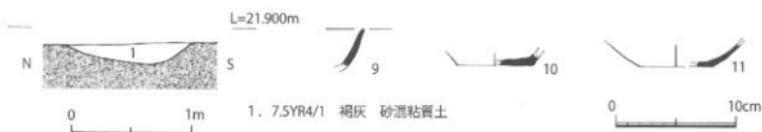
第11図 SD4 断面図 (S=1/40)



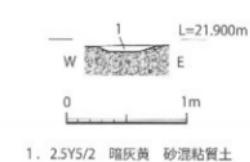
第12図 SD5 断面図 (S=1/40)

は浅いU字を呈し、埋土は褐灰色砂混粘質土の単層である。

出土遺物は第13図に掲載した。9～11は須恵器の环である。9は7～8世紀のものであるが、10・11は10世紀前半頃の遺物であり、10世紀前半頃の遺構と考えられる。



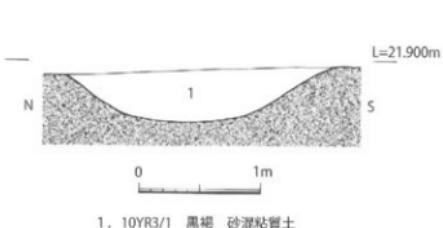
第13図 SD6 断面図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/4)



第14図 SD7 断面図 (S=1/40)

SD7 (第5・14図)

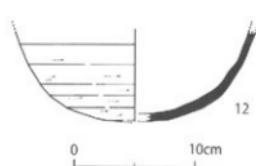
調査区の北半で検出した溝である。検出長8.2m、幅60cm、深さ10cmを測る。断面形態は浅いU字を呈し、埋土は暗灰黄色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、9～10世紀頃の遺物を含むSK4に切られしており、それ以前の遺構と考えられる。SK4から7～8世紀の遺物が出土しており、当該期の遺構の可能性が考えられる。



第15図 SD8 断面図 (S=1/40)

SD8 (第5・15図)

調査区の中央で検出した溝である。検出長5.5m、幅2.3m、深さ42cmを測る。断面形態はU字を呈し、埋土は黒褐色砂混粘質土の単層である。須恵器の小片しか出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、9～10世紀頃の遺物を含むSK4に切られており、それ以前の遺構と考えられる。



第16図 SD10 出土遺物実測図 (S=1/4)

SD9 (第5・6図)

調査区の中央で検出した溝である。検出長4m、幅1.2m、深さ22cmを測る。断面形態はU字を呈し、埋土は2層に分層できる。上層は褐灰色砂混粘質土、下層は明黄褐色粘土ブロックを含む黄灰色砂混粘質土である。土師器及び須恵器の小片しか出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、SD10に切られており、7世紀以前の遺構と考えられる。

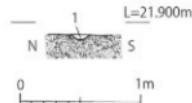
SD10 (第 5・6・16 図)

調査区の南部で検出した溝である。検出長 4m、幅 8.5m、深さ 30cm を測る。断面形態は浅いU字を呈し、埋土は 5 層に分層できる。第 1 層は灰黄褐色砂混粘質土、第 2・3 層は褐灰色砂混粘質土、第 4・5 層は黄灰色砂混粘質土である。

出土遺物は第 16 図 12 の須恵器の壺がある。図示したもの以外にも須恵器の小片が見られ、出土遺物から 7 世紀頃の遺構と考えられる。

SD11 (第 5・17 図)

調査区の中央で検出した小溝である。長さ 1.5m、幅 15cm、深さ 5cm を測る。断面形態は U 字を呈し、埋土は灰黄褐色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、7~8 世紀の遺構と考えられる SD7 に切られており、それ以前の遺構と考えられる。

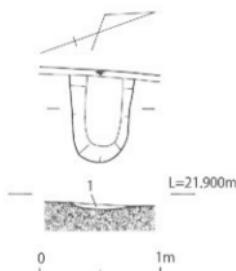


1. 10YR4/2 灰黄褐色 砂混粘質土

第 17 図 SD11 断面図 (S=1/40)

SK1 (第 18 図)

調査区の中央で検出した土坑である。西側は調査区外に延びているが、隅丸長方形の平面形態を呈すると考えられ、長辺 70cm 以上、短辺 48cm、深さ 4cm を測る。断面形態は浅いレンズ状を呈し、埋土は黄灰色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、上層遺構面からの掘り込みであることを調査区西壁で確認しており、近世以降の遺構と考えられる。



1. 2.5Y6/1 黄灰色 砂混粘質土

SK2 (第 19 図)

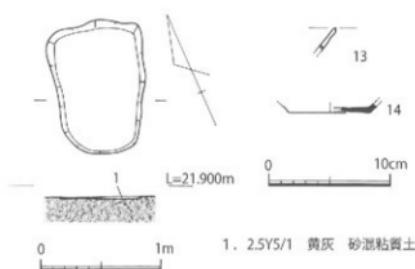
調査区北部で検出した土坑である。平面形態は長方形を呈し、長辺 1.1m、短边 80cm、深さ 3cm を測る。浅い堆積で、埋土は黄灰色砂混粘質土の単層である。

出土遺物は第 19 図に掲載した。13 は土師器の环である。14 は須恵器の壺である。出土遺物から 9 世紀末~10 世紀頃の遺構と考えられる。

第 18 図 SK1 平・断面図 (S=1/40)

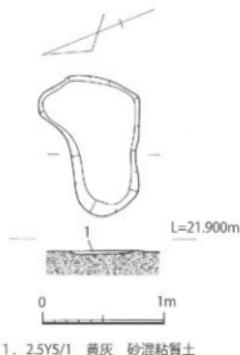
SK3 (第 20 図)

調査区北部で検出した土坑である。平面形態は長方形を呈し、長辺 1.18m、短辺 60cm、深さ 3cm を測る。浅い堆積で、埋土は黄灰色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。



1. 2.5Y5/1 黄灰色 砂混粘質土

第 19 図 SK2 平・断面図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/4)

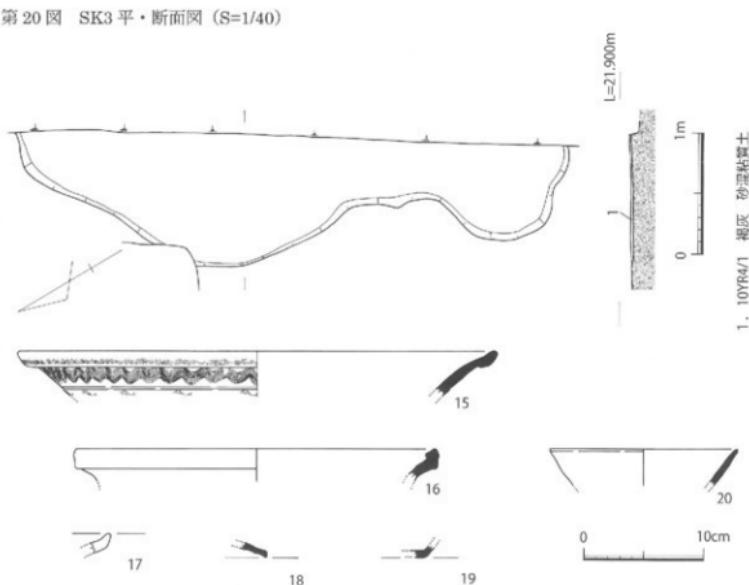


第20図 SK3 平・断面図 (S=1/40)

SK4 (第21図)

調査区北部で検出した土坑である。側溝により遺構が切られているが、調査区東壁において遺構埋土が検出されていないことから、溝状の平面形態を呈する。長辺 4.56m、短辺 1.1m 以上、深さ 3cm を測る。浅い堆積で、埋土は褐灰色砂混粘質土の単層である。

出土遺物は第21図に掲載した。15・16は須恵器の蓋である。15の外面には波状文が施されている。17は土師質土器の鍋である。18は須恵器の蓋である。19・20は須恵器の壺である。7～8世紀の遺物を多く含むが、SD7を切っており、これらの遺物はSD7からの混入の可能性がある。17の土師質土器の鍋は10世紀、19の須恵器壺は9世紀のもので、9～10世紀の遺構と考えられる。



第21図 SK4 平・断面図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/4)

SK5 (第22図)

調査区中部で検出した土坑である。西半が調査区外であるが、平面形態は隅丸長方形を呈すると考えられ、長辺 2.42m 以上、短辺 1.67m、深さ 6cm を測る。浅い堆積で、埋土は黄灰色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、7～8世紀と考えられる SD7 に切られており、それ以前の遺構と考えられる。

第2節 II区の調査

(1) 調査地の概要と基本層序

調査地は、試掘調査で検出した旧河道の東岸微高地にあたる。調査区の東側隣接地には多肥松林遺跡（高松土木）が所在する。現地表面の標高は22.2mを測る。周知の埋蔵文化財包蔵地のうち、建物基礎で影響を受ける範囲の約230m²部分について調査を実施した。調査区の西面と北面断面を第24図に掲載した。第1層は耕作土である。第2層は褐灰色砂混粘質土で、旧耕作土である。第3層はにぶい黄橙色砂混粘質土で、床土である。第4層は黄灰色砂混粘質土で、遺物包含層である。第5～12層は遺構埋土である。第13

層は浅黄色シルト～粘土で地山である。遺構面は地山の第13層上面の1面のみで検出した。古墳時代～近世までの溝6条、土坑6基、掘立柱建物跡2棟、ピット多数を検出した。

なお、遺構面直上で出土した土器を第25図に掲載した。21は弥生土器の甌である。口縁部に凹線3条と円形浮文が施されている。22は肥前系陶器の鉢である。23は土師質土器の擂鉢である。24・25は土師質土器の鍋脚部である。S2は削器である。

(2) 遺構

SD1（第23・26図）

調査区中央で検出した溝である。長さ3m、幅46cm、深さ8cmを測る。断面形態は浅いU字を呈し、埋土は灰白色細砂の単層である。

出土遺物は第26図26の土師器の皿のみである。11世紀のものであるが、埋土が他の近世遺構と同じであることから、近世の遺構と考えられる。

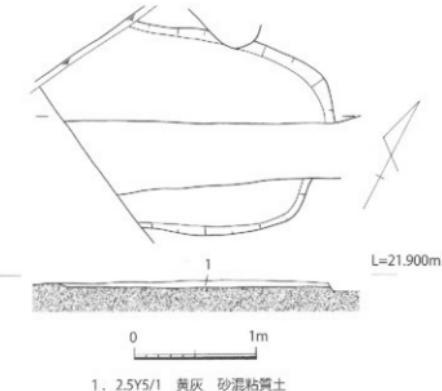
SD2（第23・27図）

調査区南端で検出した溝である。検出長2.8m、幅96cm、深さ5cmを測る。断面形態は浅いU字を呈し、埋土は灰白色細砂の単層である。

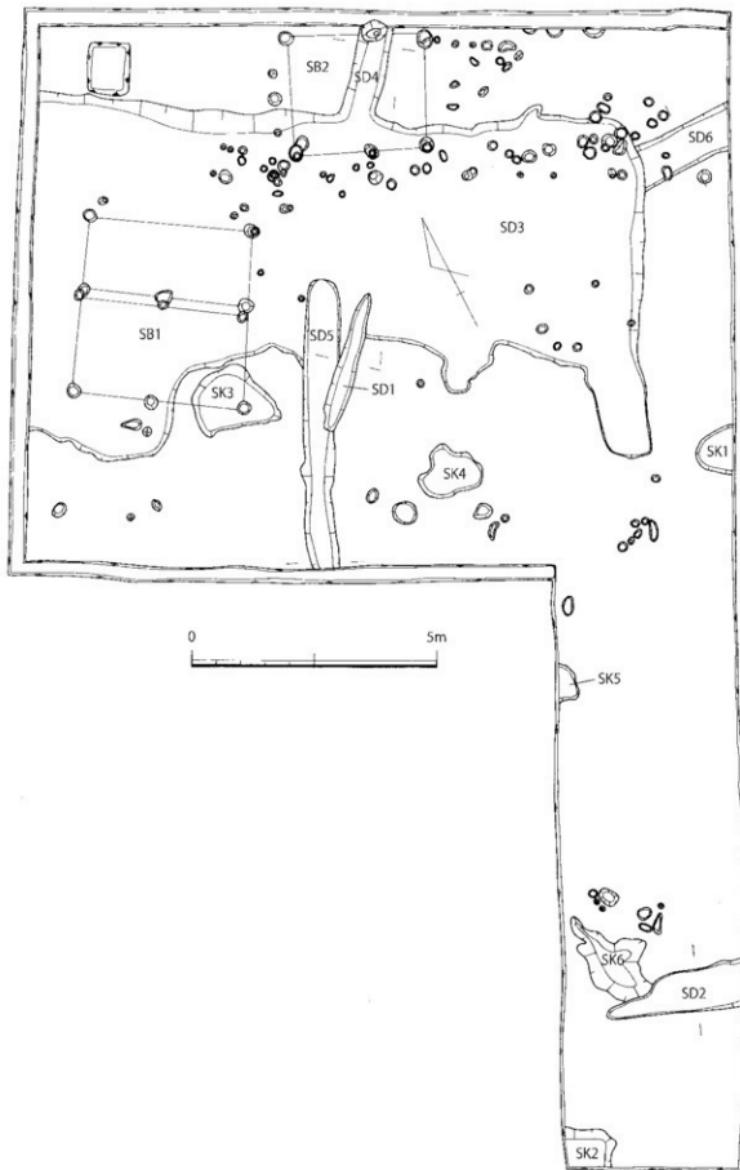
出土遺物のうち図示できたものは第27図27の土師器の杯のみである。図示したもの以外に、陶器片が出土しており、近世の遺構と考えられる。

SD3（第23・24・28図）

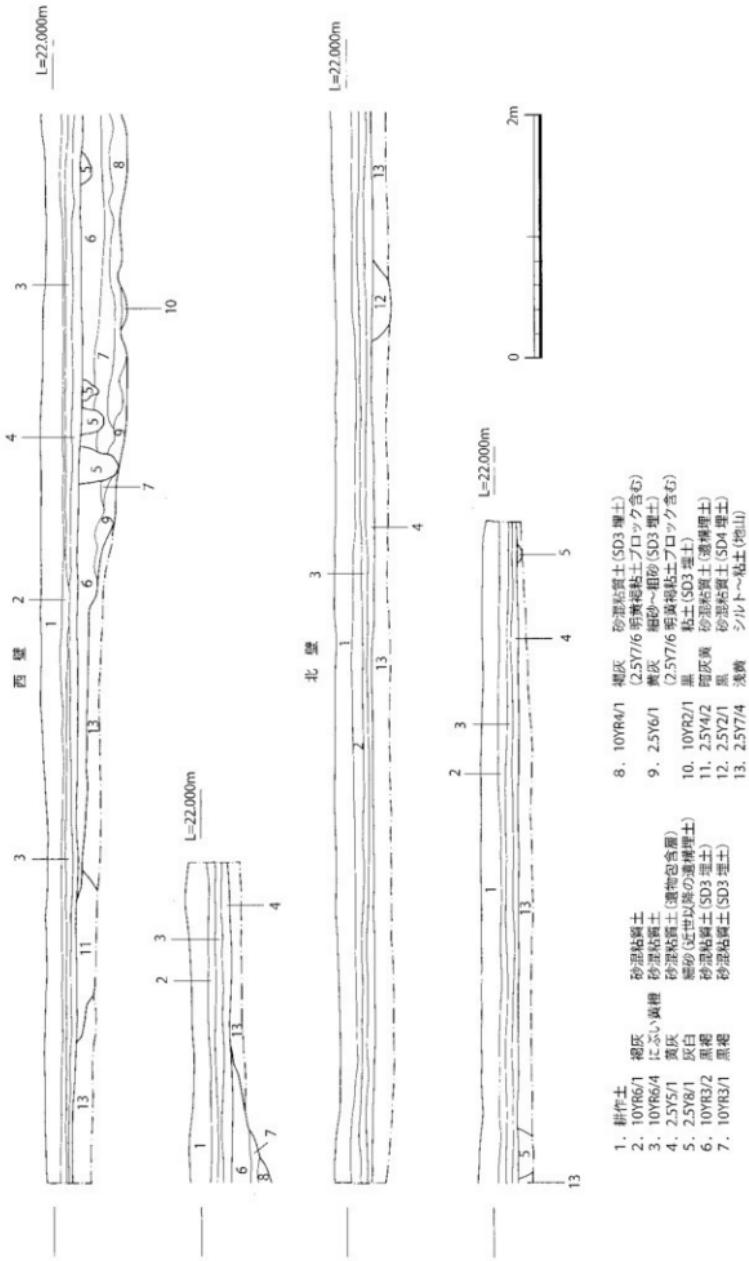
調査区の北半で検出した遺構である。ほぼ現地剖と同じ方位で掘削されており、検出長13m、幅5～7.5m、深さ40cmを測る。断面形態は浅いU字を呈し、西側ほど深くなっている。埋土は検出部分中央部では3層であるが、調査区西壁では5層に分層できた。第1・2層は黒褐色砂混粘質土、第3層は褐灰色砂混粘



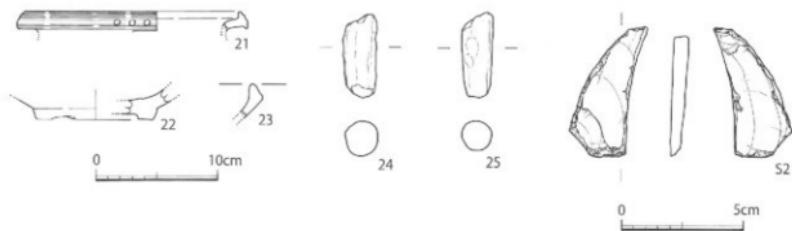
第22図 SK5 平・断面図 (S=1/40)



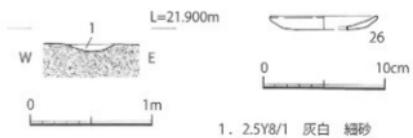
第23図 II区平面図 (S=1/100)



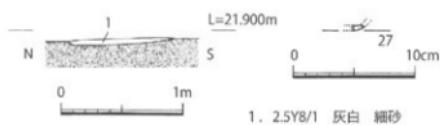
第24図 II区西壁・北壁断面図 (S=1/40)



第25図 II区遺構面上出土遺物実測図（土器：S=1/4, 石器：S=1/2）



第26図 SD1断面図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/4)



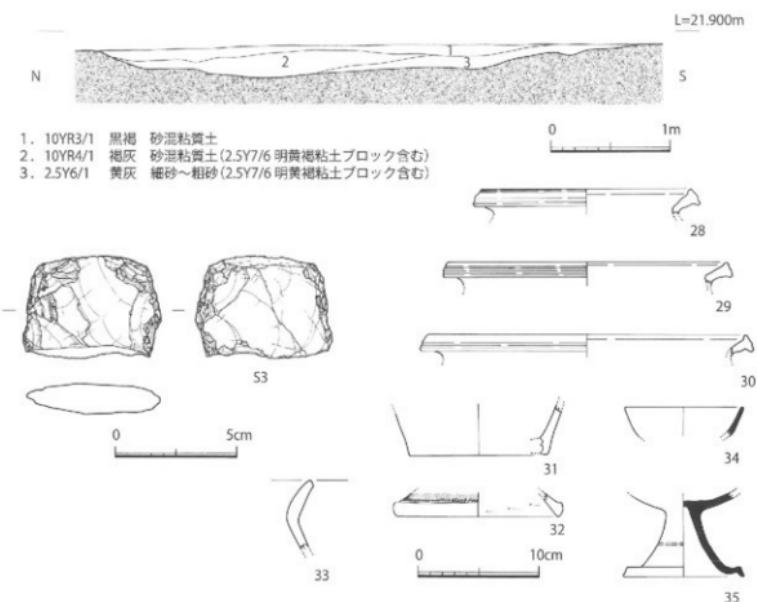
第27図 SD2断面図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/4)
SD4 (第23・24図)
SD3の北側で検出した溝である。検出長2.2m、幅70cm、深さ18cmを測る。断面形態は逆台形を呈し、埋土は黒色砂混粘質土の単層である。遺物は須恵器の小片しか出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、SD3との切り合い関係は判然とせず、直交して接続しており、同時期の遺構と考えられる。

SD5 (第23・29図)

SD3の南側で検出した溝である。検出長6.2m、幅70cm、深さ24cmを測る。断面形態は逆台形を呈し、埋土は黒色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、SD4同様、SD3と直交して接続しており、同時期の遺構と考えられる。

質上、第4層は黄灰色細砂～粗砂、第5層は黒色粘土である。遺構の西側には試掘調査で検出した旧河道が存在することから、旧河道から引き込んだ溝と考えられる。なお、北側にはSD4、南側にはSD5が直交して接続しており、これら溝の取水または排水池としての機能が考えられる。

出土遺物は第28図に掲載した。S3は石鍬である。28～30は弥生土器の甕の口縁部である。いずれも口縁部に凹線が施されている。31は弥生土器の底部である。32は弥生土器の高杯の脚部である。裾部に刺突文が施されている。33は土師



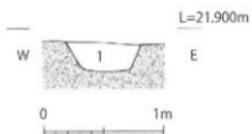
第28図 SD3断面図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (土器: S=1/4, 石器: S=1/2)

SD6 (第23・30図)

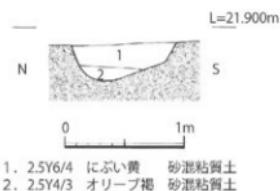
調査区北東端でSD3に切られて検出した溝である。検出長2.2m、幅85cm、深さ38cmを測る。断面形態はU字を呈し、埋土は2層に分層できる。上層はにぶい黄色砂混粘質土、下層はオリーブ褐色砂混粘質土である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、SD3に切られており、9世紀以前の遺構と考えられる。

SK1 (第31図)

調査区中央東端で検出した土坑である。東半は調査区外に延びるために平面形態は不明であるが、長径1.03m、短径76cm以上、深さ6cmを測る。断面形態は浅い逆台形を呈し、埋土は灰白色細砂の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、埋土が他の近世の遺構と同じであることから、近世の遺構と考えられる。



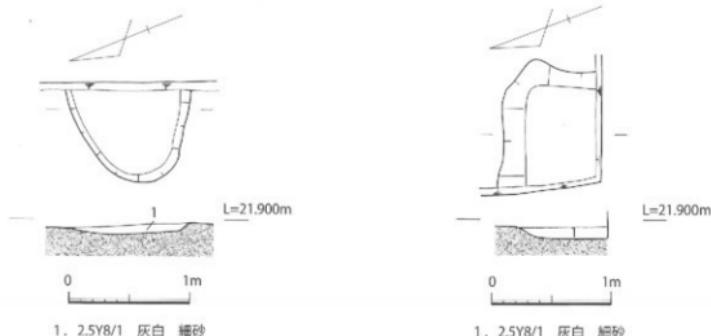
第29図 SD5断面図 (S=1/40)



第30図 SD6断面図 (S=1/40)

SK2 (第32図)

調査区南端で検出した土坑である。北東部の一部しか検出しておらず、調査区外に延びるため平面形態は不明であるが、長辺 1.08m 以上、短辺 90cm 以上、深さ 10cm を測る。断面形態は浅い逆台形を呈し、埋土は灰白色細砂の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、埋土が他の近世の遺構と同じであることから、近世の遺構と考えられる。



第31図 SK1 平・断面図 (S=1/40)

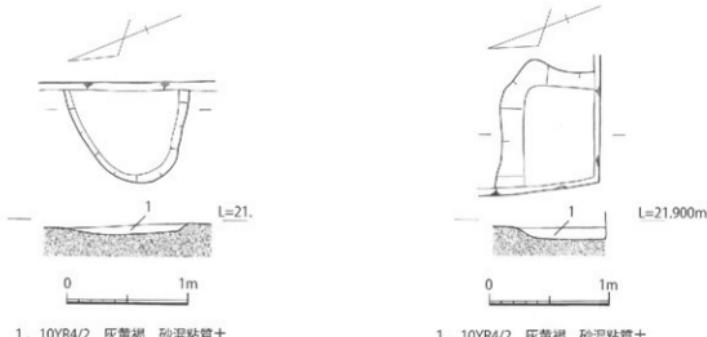
第32図 SK2 平・断面図 (S=1/40)

SK3 (第33図)

調査区中央で検出した土坑である。平面形態は半円形を呈し、長径 1.7m、短径 1.2m、深さ 4cm を測る。浅い堆積で、埋土は灰黄褐色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、近世の遺構であるSB1に切られており、それ以前の遺構と考えられる。

SK4 (第34図)

調査区中央で検出した土坑である。不整形な平面形態を呈し、長辺 1.3m、短辺 1.1m、深さ 10cm を測る。断面形態は浅い逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色砂混粘質土の単層である。弥生土器または土師器の小片しか出土しておらず、詳細な時期は不明である。



第33図 SK3 平・断面図 (S=1/40)

第34図 SK4 平・断面図 (S=1/40)

SK5 (第35図)

調査区中央で検出した土坑である。西半は調査区外に延びるため平面形態は不明であるが、長辺90cm以上、短辺40cm以上、深さ12cmを測る。断面形態は逆台形を呈し、埋土は黒色粘土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

SK6 (第36図)

調査区南端で検出した土坑である。不整形な平面形態を呈し、長辺2.18m、短辺1.34m、深さ38cmを測る。断面形態はU字を呈し、埋土は黒色粘土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、近世の遺構であるSD2に切られており、それ以前の遺構と考えられる。

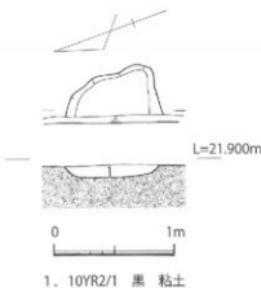
SB1 (第37・38図)

調査区の西部で検出した掘立柱建物跡である。東西2間(3.5m)×南北2間(3.65m)、床面積12.8m²を測り、主軸方位はN-27°-Wである。建物は2間取りで、南側がやや広い。掘立柱建物跡を構成する柱穴は楕円形を呈し、直径20~35cm、深さ10~50cmを測り、埋土は灰白色シルト~細砂の単層である。間仕切り部分は柱穴が再掘削されており、建て替えが考えられる。

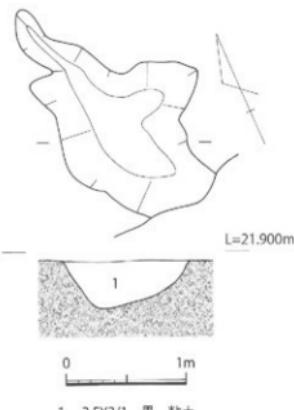
出土遺物は第37図に掲載した。36は土師器の环である。37は須恵器の环である。10世紀前半の遺物を含んでいるが、埋土が他の近世の遺構と同じであることから、近世の遺構と考えられる。

SB2 (第39図)

調査区の北部で検出した掘立柱建物跡である。東西2間(2.8m)×南北1間(2.4m)、床面積6.72m²を測り、主軸方位はN-20°-Wである。掘立柱建物跡を構成する柱穴は楕円形を呈し、直径30~50cm、深さ20~50cmを測り、埋土は灰白色細砂の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、埋土が他の近世の遺構と同じであることから、近世の遺構と考えられる。



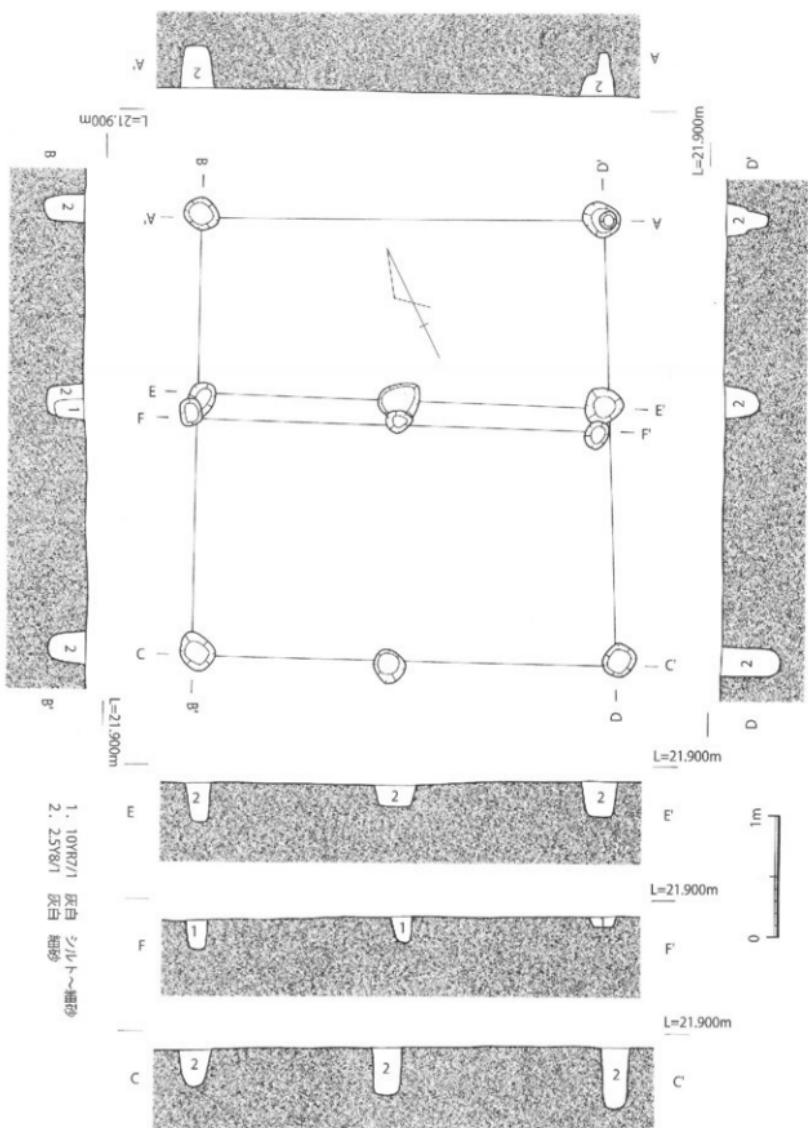
第35図 SK5 平・断面図 (S=1/40)



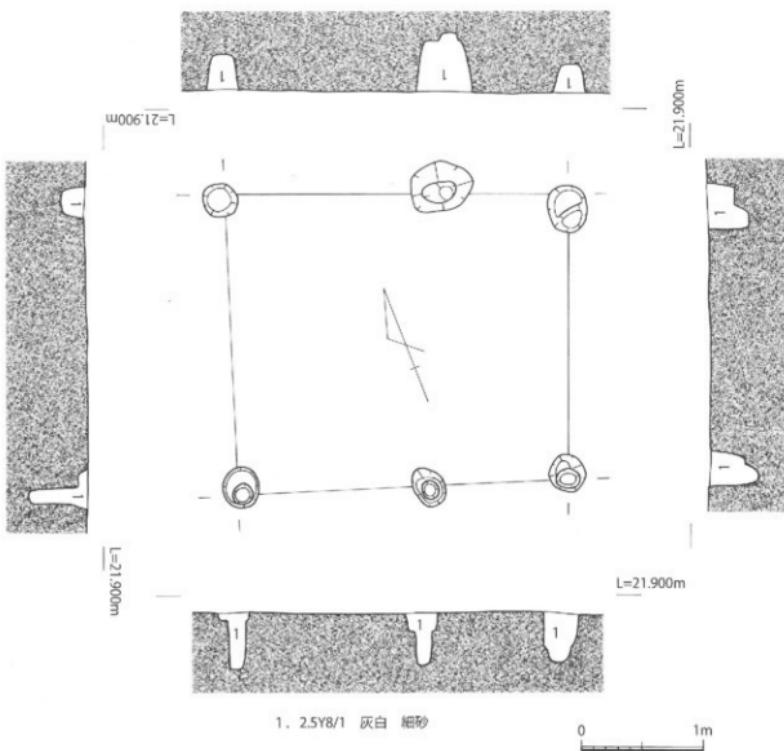
第36図 SK6 平・断面図 (S=1/40)



第37図 SB1出土遺物実測図 (S=1/4)



第38図 SB1 平・断面図 (S=1/40)

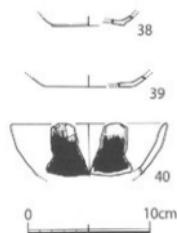


第39図 SB2 平・断面図 (S=1/40)

ピット（第23・40図）

SB2の南側から東側にかけて多数のピットを検出した。直径10～30cm程度の円形を呈し、深さは2～60cmを測る。一部暗灰黄色砂混粘質土のものもあるが、埋土は灰白色細砂のものが多い。特に、SB2の南側において、SB2の主軸方位とほぼ同方位でピットが並んでおり、塀状の施設が想定できる。

ピット出土遺物は第40図に掲載した。38・39は土師器の壊で11世紀のものである。40は産地不明陶器の碗で近世のものである。埋土が他の近世の遺構と同じであることから、近世の遺構と考えられる。



第40図 ピット出土遺物実測図 (S=1/4)

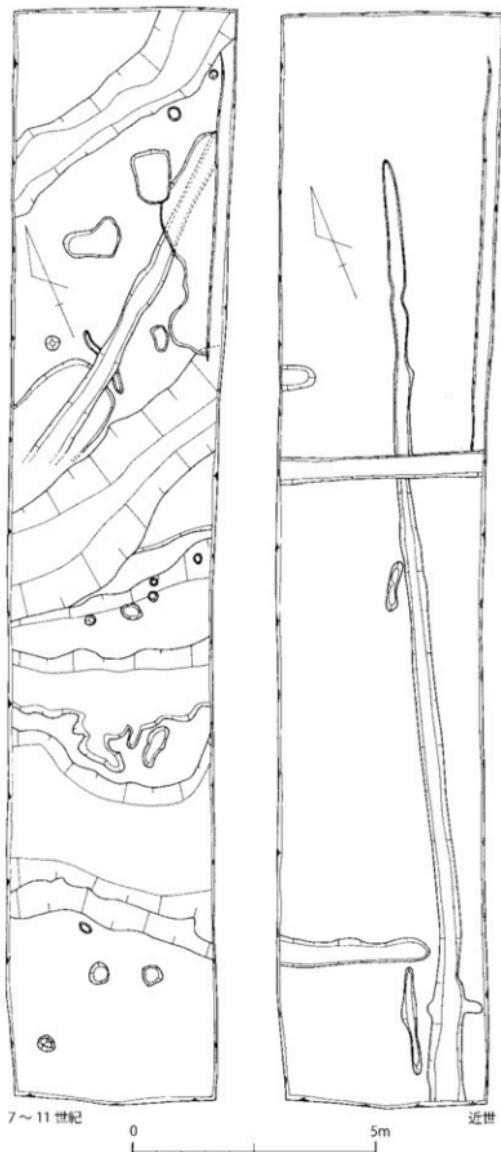
第4章 まとめ

今回の調査では試掘調査において南北に流れる旧河道を検出した。この旧河道は、多肥松林遺跡（県道）から、今回の調査地を通り、松林遺跡（通学路）、さらに多肥松林遺跡（高校）へ流れる流路であることが予想される。この旧河道の西側微高地上には松林遺跡（宅地造成）が所在し、その集落域の東限が今回の調査地のI区にあたると考えられる。また、旧河道の東側微高地上には、多肥松林遺跡（高松上木）が所在し、こちらもその西限がII区にあたると考えられる。

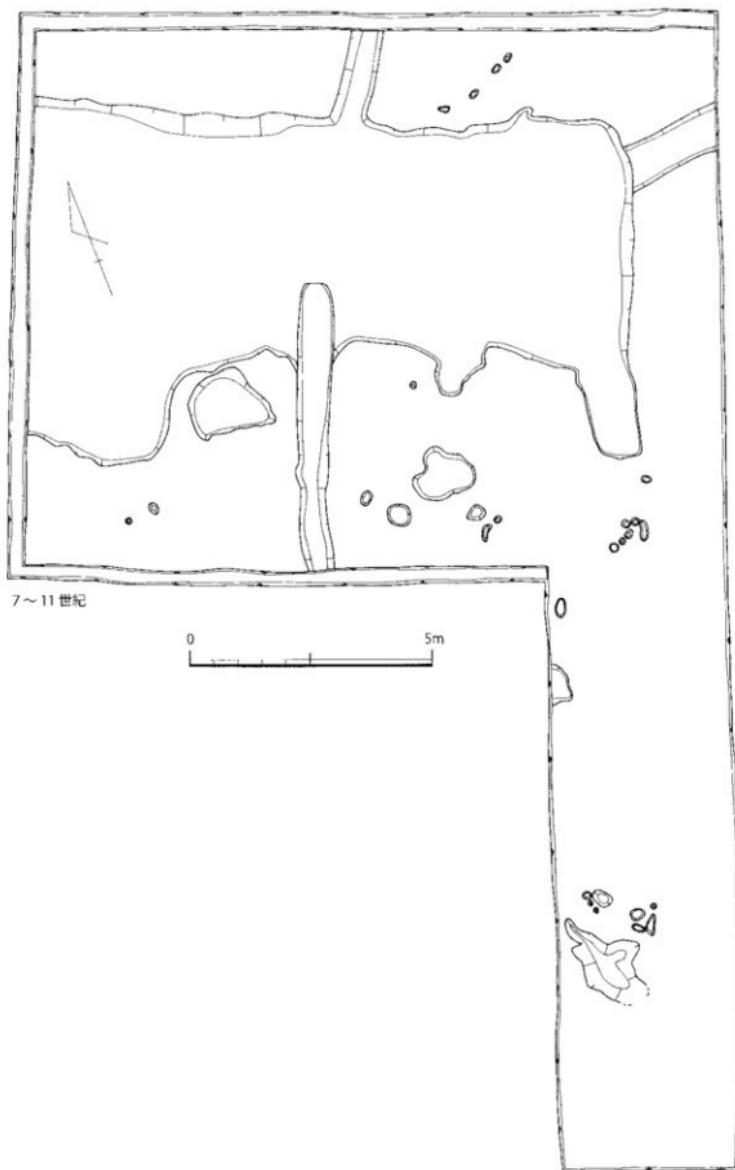
今回の調査では概ね7世紀～11世紀と近世の遺構・遺物を検出している。その変遷を紹介し、まとめにかえたい。

7世紀～11世紀ではI・II区とも溝を多数検出した。I区の溝が多数削削されている状況は隣接する松林遺跡（宅地造成）と同様である。一方、II区では旧河道からSD3を引き込み、取水または排水施設としての利用が考えられる。

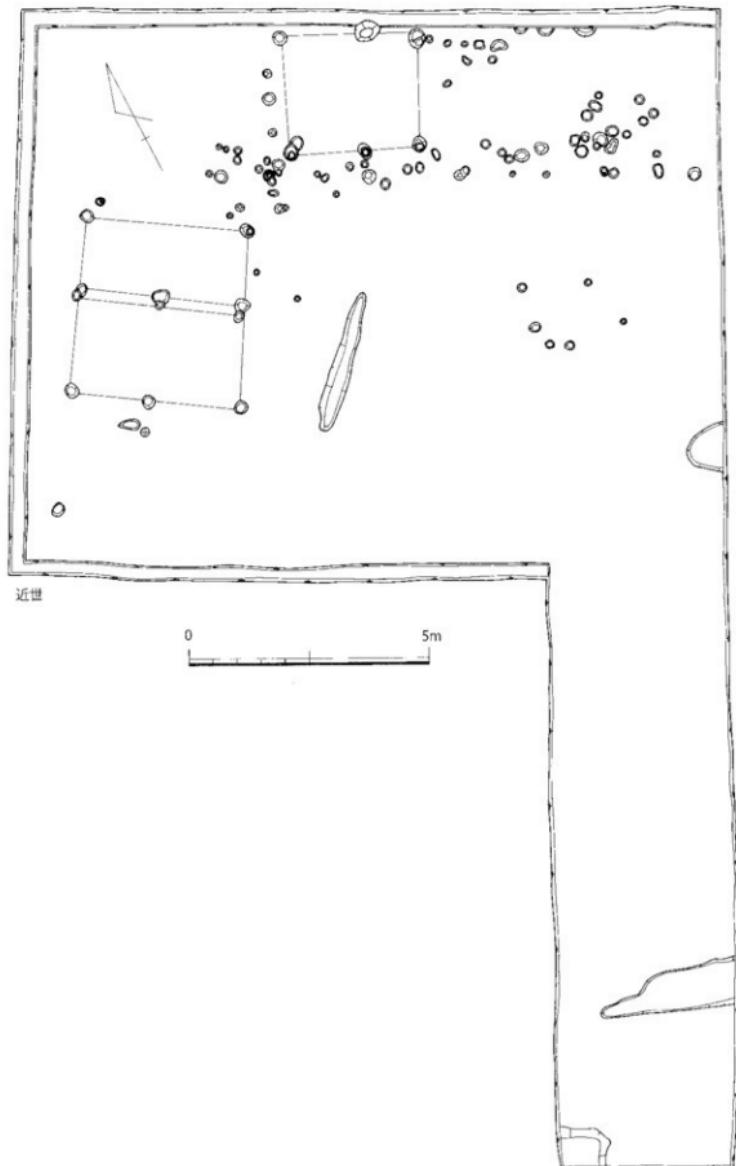
近世ではI区では溝しか検出していないが、II区では掘立柱建物跡を2棟検出しており、居住域であったと考えられる。



第41図 I区遺構変遷図 (S=1/100)



第42図 II区遺構変遷図① (S=1/100)



第43図 II区遺構変遷図② (S=1/100)

土器観察表

番号	器種	図版	調査区	遺構名	法量(cm)			外 围	内 围	色 調 (上=外圍、下=内围)	胎土	焼成
					口径	底径	高さ					
1	須恵器 甕	4	試掘		13.6	11.1	1.8	ナデ	ナデ	SPB6/1 青灰 SPB6/1 青灰	密	良好
2	須恵器 甕	4	試掘		9.1	(1.2)		ナデ	ナデ	SPB7/1 朝青灰 SPB7/1 朝青灰	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
3	土師質土器 甕	7	I 区	遺構面直上	30.0	(3.5)		ナデ	ナデ	2.5Y7/2 灰黄 10YR6/4 にぶい黄橙	やや粗 2mm以下の石英・長石含む	良
4	須恵器 甕	7	I 区	遺構面直上	7.2	(1.9)		回転ナデ・ヘラ切り 火拂	回転ナデ	SB6/1 青灰 SB6/1 青灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
5	須恵器 甕	7	I 区	遺構面直上		(2.2)		回転ナデ 棘残	回転ナデ	N6/0 反 N6/0 反	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
6	土師器 甕	10	I 区	SD3		(1.4)		ナデ	ナデ	SYR8/8 棚 SYR8/8 棚	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
7	土師器 甕	10	I 区	SD3		(0.7)		ナデ	ナデ	SYR7/6 棚 SYR7/6 棚	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
8	土師器 甕	10	I 区	SD3	6.1	(0.8)		回転ナデ	回転ナデ	2.5YR6/6 棚 10YR6/2 反黄	1mm以下の石英・長石含む	良
9	須恵器 甕	13	I 区	SD6		(3.0)		回転ナデ	回転ナデ	N6/0 反 N7/0 反白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
10	須恵器 甕	13	I 区	SD6	6.2	(1.0)		回転ナデ	回転ナデ	N7/0 反白 N7/0 反白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
11	須恵器 甕	13	I 区	SD6	6.3	(1.0)		回転ナデ	回転ナデ	N7/0 反白 N7/0 反白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
12	須恵器 甕	16	I 区	SD10		(7.6)		回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	2.5Y7/1 反白 2.5Y7/1 反白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
13	土師器 甕	19	I 区	SK2		(1.8)		マツツ	マツツ	10YR8/2 反白 10YR8/2 反白	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
14	須恵器 甕	19	I 区	SK2	7.0	(0.8)		回転ナデ	回転ナデ	7.5Y8/1 反白 5Y8/1 反白	精良 1mm以下の石英・長石含む	良好
15	須恵器 甕	21	I 区	SK4	39.4			回転ナデ 波状文・苗条1条	回転ナデ	SY7/1 灰白 SY7/1 反白	1mm以下の石英・長石含む	良好
16	須恵器 甕	21	I 区	SK4	29.8			回転ナデ	回転ナデ	N6/0 反 N7/0 反白	1mm以下の石英・長石含む	良好
17	土師質土器 甕	21	I 区	SK4		(1.7)		マツツ	マツツ	10YR8/6 刷黄 10YR8/6 刷黄	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良好
18	須恵器 甕	21	I 区	SK4		(1.2)		回転ナデ	回転ナデ	N5/0 反 N5/0 反	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
19	須恵器 甕	21	I 区	SK4		(1.0)		回転ナデ	回転ナデ	N6/0 反白 N6/0 反白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
20	須恵器 甕	21	I 区	SK4	15.4			回転ナデ	回転ナデ	N6/0 反 N6/0 反	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
21	須恵器 甕	25	II 区	遺構面直上	17.6	(1.8)		ナデ	ナデ	7.5YR5/6 剛格 7.5YR5/6 剛格	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良
22	泥前系陶器 甕	25	II 区	遺構面直上	9.5	(2.6)		回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/4 にぶい黄 7.5YR5/4 にぶい黄	2mm以下の石英・長石含む	良好
23	土師質土器 甕	25	E 区	遺構面直上		(2.9)		マツツ	マツツ	10YR8/8 朝青 10YR8/8 朝青	1mm以下の石英・長石含む	良好
24	土師質土器 甕	25	E 区	遺構面直上		(6.8)		指捺ナデ		7.5YR5/6 明堀	やや粗 1mm以下の石英・長石・雲母含む	良
25	土師質土器 甕	25	E 区	遺構面直上		(7.0)		指捺ナデ		10YR8/6 刷黄	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良
26	土師器 甕	26	II 区	SD1	8.8	5.8	1.2	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y7/2 灰黄 2.5Y7/2 灰黄	1mm以下の石英・長石含む	良
27	土師器 甕	27	II 区	SD2		(0.6)		ナデ	ナデ	7.5YR7/3 にぶい黄 7.5YR7/3 にぶい黄	1mm以下の石英・長石含む	良好
28	須生土器 甕	28	II 区	SD3	17.2			ナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい黄 2.5Y5/2 透青黄	1mm以下の石英・長石含む	良
29	須生土器 甕	28	II 区	SD3	23.0			ナデ	ナデ	7.5YR5/6 透褐 7.5YR6/6 棚	やや粗 2mm以下の石英・長石・雲母含む	良
30	須生土器 甕	28	II 区	SD3	26.1			ナデ	ナデ	7.5YR5/6 棚 7.5YR5/6 透褐	やや粗 2mm以下の石英・長石・雲母含む	良
31	須生土器 甕	28	II 区	SD3	11.6	(4.2)		マツツ	マツツ	7.5YR8/4 にぶい黄 7.5YR8/4 にぶい黄	1mm以下の石英・長石含む	良好
32	須生土器 甕	28	II 区	SD3	13.3	(1.9)		タテハケ 倒立文	ヨコハラケズリ	5YR5/6 透赤褐 5YR6/6 透赤褐	やや粗 1mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
33	土師器 甕	28	II 区	SD3		(5.7)		マツツ	マツツ	10YR8/4 透黄 10YR8/4 透黄	1mm以下の石英・長石含む	良
34	須恵器 甕	28	II 区	SD3	9.5	(2.4)		回転ナデ	回転ナデ	N7/0 反白 N7/0 反白	1mm以下の石英・長石含む	良好
35	須恵器 甕	28	II 区	SD3	9.8	(5.9)		回転ナデ	回転ナデ	5Y6/1 灰 5Y6/1 灰	1mm以下の石英・長石含む	良好
36	土師器 甕	37	II 区	SB1		(1.5)		回転ナデ	回転ナデ	10YR7/2 にぶい黄 10YR7/2 にぶい黄	1mm以下の石英・長石含む	良好
37	須恵器 甕	37	II 区	SB1		(0.8)		回転ナデ	回転ナデ	N6/0 反 N6/0 反	1mm以下の石英・長石含む	良
38	土師器 甕	40	II 区	SP86	6.0	(0.6)		ナデ	ナデ	2.5Y8/2 灰白 2.5Y8/2 灰白	1mm以下の石英・長石含む	良好
39	土師器 甕	40	II 区	SP86	7.0	(0.9)		回転ナデ	回転ナデ	2.5Y8/1 灰白 2.5Y8/1 灰白	1mm以下の石英・長石含む	良
40	底地不明陶器 甕	40	II 区	SP70	12.6	(4.3)		回転ナデ	回転ナデ	10YR2/1 黑 10YR2/1 黑	精良	良好

石器観察表

番号	器種	図版	調査区	遺構名	法量(cm)			重量(g)	石材	特徴
					長	幅	厚			
S1	石椎	4		試機	4.6	2.0	1.0	12.6	サヌカイト	基部と先端部を欠く
S2	削器	25	II区	遺構表面	5.3	3.3	0.8	11.7	サヌカイト	側縁部と刃部の一部のみ残る
S3	石鋸	28	II区	SD3	4.3	5.8	1.3	41.7	サヌカイト	基部のみ残る

鉄製品観察表

番号	器種	図版	調査区	遺構名	法量(cm)			重量(g)	石材	特徴
					長	幅	厚			
K1	釘	8	I区	SD1	4.1	0.7	0.3	断面方形		
K2	釘	8	I区	SD1	3.1	0.6	0.4	断面方形		
K3	釘	8	I区	SD1	2.8	0.5	0.4	断面方形		
K4	釘	8	I区	SD1	0.7	0.5	0.5	断面方形		



写真1 I区機械掘削状況（北から）



写真2 I区遺構検出状況（北から）



写真3 I区SD6完掘状況（南西から）



写真4 I区SD8完掘状況（南西から）



写真5 I区SD9・10完掘状況（南西から）



写真6 I区SD10土器出土状況（西から）



写真7 I区完掘状況（北から）



写真8 I区完掘状況（南から）



写真9 II区遺構検出状況（西から）



写真10 II区北壁土層断面（南西から）

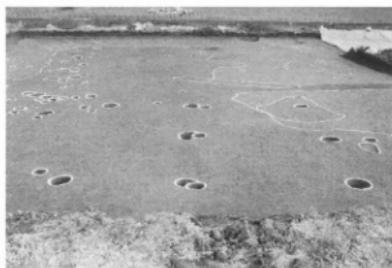


写真11 II区SB1完掘状況（西から）

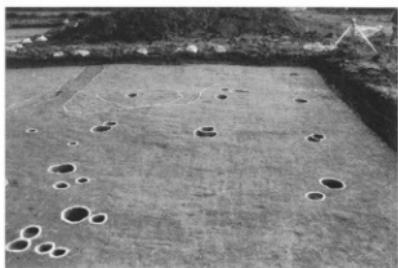


写真12 II区SB1完掘状況（北から）



写真13 II区SB2完掘状況（南東から）

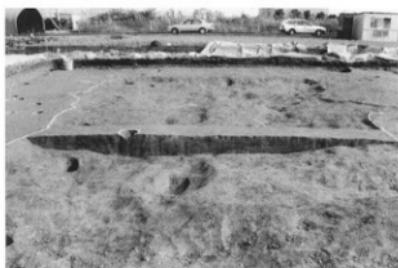


写真14 II区SD3断面（西から）



写真15 II区SD3断面（北東から）



写真16 II区完掘状況（北東から）

報 告 書 抄 錄

電器店建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

多肥松林遺跡 (電器店)

平成 18 年 2 月 28 日

編 集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目 8 番 15 号
発 行 高松市教育委員会
株式会社ビッグ・エス
印 刷 有限会社 中央ファイリング